

特別支援教育におけるメディア利用

～2016 年度「NHK 特別支援学校(小学部)教師と特別支援学級(小学校)教師の メディア利用と意識に関する調査」から～

宇治橋 祐之 (NHK 放送文化研究所)

概要：NHK 放送文化研究所では 2016 年度、特別支援学校（小学部）と特別支援学級（小学校）の教師を対象にメディア利用と意識に関する調査を実施した。テレビ受像機やパソコンなどの機器とインターネット環境については一定の整備が進み、ラジオ・CDラジカセの利用が多かった。またタブレット端末の利用が広がっていた。利用されているメディア教材は自作教材と音声教材が多かった。特別支援教育の現場では、児童の障害種に合わせてメディアを選択して利用している姿がみられた。

キーワード：NHK for School, 学校放送番組, メディア教材, タブレット端末

1 はじめに

NHK 放送文化研究所では 2016 年度に全国の特別支援学校（小学部）と、小学校の特別支援学級の教師を対象に「NHK 特別支援学校(小学部)教師と特別支援学級(小学校)教師のメディア利用と意識に関する調査」を実施した。調査では特別支援学校（以下「支援校」と表記）と「特別支援学級」（以下「支援級」と表記）で、授業でメディアを利用している可能性が高いと考えられる最年長の児童を担当している教師を対象とした。

本稿では機器の利用とメディア教材の利用、そしてメディア教材を授業で利用する際に期待する効果について、小学校の通常学級の調査の結果とも比較しながら、特別支援教育の現場でのメディア利用の実態とその背景を考察する。

2 調査の方法

調査にあたっては、全国のすべての特別支援学校（小学部）教師と、「2016 年度 NHK 小学校教師のメディア利用と意識に関する調査」の対象校で、特別支援学級または通級指導教室のある場合、その担当教師に調査を依頼した。特別支援教育の場では、すべての学年に児童が在籍していないこともあるため、対象学年は授業で

のメディア利用が多いと考えられる最年長の児童を担当している教師とした。

支援校と支援級の調査結果を比較するとともに、小学校 1～6 年担任教師（以下「通常級」と表記）を対象とした「2016 年度小学校教師のメディア利用と意識に関する調査」の結果とも比較を行った。

3 調査の結果

（1）支援校・支援級・通常級で教師が利用しているメディア機器

表 1 は、「テレビ受像機」や「パソコン」などのメディア機器と、これらの機器を授業で利用するにあたって重要なインターネット環境についての利用の実態である。

該当するメディア機器を利用できる環境を表す「利用環境あり」についてみていくと、支援校教師では、多い順に「ラジオ・CDラジカセ」（94%）、「デジタルカメラ・デジタルビデオカメラ」（93%）、「パソコン」（90%）、「インターネット」（81%）、「プロジェクター」（80%）、「タブレット端末」（80%）、「録画再生機」（77%）、「テレビ受像機」（74%）で、この 8 項目は 7 割を超える教師が授業で利用できる環境にあった。

支援級教師の利用環境は、上位 4 項目までは

表1 支援校・支援級・通常級で教師が利用しているメディア機器

上段 支援校教師 (n=815) 中段 支援級教師 (n=650) 下段 通常級教師 (n=2307)	利用環境あり	利用あり
ラジオ・CDラジカセ ※通常級調査では選択肢に含めていない	94 % 90 —	89 % 85 —
デジタルカメラ ・ビデオカメラ	93 % 87 91	88 % 80 85
パソコン	90 84 89	84 79 83
インターネット	81 81 86	65 72 77
プロジェクター	80 54 78	56 30 56
タブレット端末	80 44 45	67 36 33
録画再生機	77 65 74	65 50 59
テレビ受像機	74 67 77	63 50 64
実物投影機	42 56 83	17 30 66
電子黒板	33 31 49	15 15 31

支援校教師と同様「ラジオ・CDラジカセ」(90%)、「デジタルカメラ・デジタルビデオカメラ」(87%)、「パソコン」(84%)、「インターネット」(81%)であり、以下「テレビ受像機」(67%)と「録画再生機」(65%)まで含めた6項目について、6割を超える教師が授業に利用できる環境にあると回答した。

次にこれらの機器を授業で実際に利用した「利用あり」の教師の割合をみていくと、支援校教師、支援級教師ともに利用が多い上位3項

目は「利用環境あり」と同じで、「ラジオ・CDラジカセ」(89%、85%)、「デジタルカメラ・デジタルビデオカメラ」(88%、80%)、「パソコン」(84%、79%)であった。「デジタルカメラ・デジタルビデオカメラ」と「パソコン」については、通常級教師でもそれぞれ85%と83%で利用が多い上位2項目である。4位以下の項目では、支援校教師で「タブレット端末」が67%の教師に利用されている点が注目される。この値は支援級教師の36%、通常級教師の33%を大幅に上回っている。

「録画再生機」と「テレビ受像機」は、支援校教師、支援級教師、通常級教師いずれにおいても50~65%の教師が授業で利用している。

「実物投影機」と「電子黒板」は、通常級に比べて、支援校、支援級での利用が少ないが、少人数でクラスが編成されている特別支援教育の授業では、これらの機器の特性を生かす場面が少ないためと考えられる。

(2) 支援校・支援級・通常級で教師が利用しているメディア教材

次に放送番組やDVD教材、インターネット上のコンテンツなど、表2に示した10種類のメディア教材の利用状況をみていく。

支援校教師では、「独自に撮影したり、編集したりして、あなたや他の先生が作成した教材(以下、「自作教材」)」(80%)の利用が圧倒的に多く、これに続くのが「ラジオやCDなどの音声教材(以下、「音声教材」)」(60%)で、さらに「NHKデジタル教材以外のインターネット上のコンテンツや動画、静止画(以下、「ネット上のコンテンツ」)」(46%)、「NHK学校放送番組」と「市販のビデオ教材やDVD教材」(23%)、「NHKデジタル教材」(21%)が、2割以上の教師に利用されている。「自作教材」が多いのは、支援校では多様な状況の児童が多いことによるものと考えられる。

支援級教師では、支援校教師の場合のように利用が6割を超えるメディア教材はないが、多

表2 支援校・支援級・通常級で教師が利用しているメディア教材

上段 支援校教師 中段 支援級教師 下段 通常級教師	利用 あり
自作教材	80 37 46
ラジオやCDなどの音声教材 ※通常級調査では選択肢に含めていない	60 53 —
インターネット上のコンテンツ	46 38 46
NHK学校放送番組	23 39 50
市販のビデオ教材やデジタル教材	23 27 43
NHKデジタル教材	21 33 48
パソコン用教材	20 27 23
指導者用のデジタル教科書	11 23 47
学校放送番組以外のNHK番組	8 9 11
NHK以外の放送番組	6 7 9
NHK for School利用	32 50 63

様な教材が授業で利用されていることがわかる。支援級教師の利用が最も多いのは「音声教材」(53%)、さらに「NHK 学校放送番組」(39%)、「ネット上のコンテンツ」(38%)、「自作教材」(37%)が30%台で続く。

また「NHK 学校放送番組」と「NHK デジタル教材」、のいずれかでも利用したという【NHK for School 利用】教師は、支援校教師では32%、支

援級教師では50%である。支援級教師の50%は、「音声教材」と並ぶ高い数値で注目される。

メディア教材の利用は、支援校の障害種別でもさまざまな特徴がみられた。表には示していないが、【NHK for School 利用】では「聴覚障害」(61%)や「病弱・身体虚弱」(59%)では、支援級教師の値(50%)を上回り、通常級教師(62%)と同程度利用されていた。これに対して「知的障害」担当教師の場合には、【NHK for School 利用】は限定的(18%)である。

通常級教師では47%が利用している「指導者用のデジタル教科書」は、支援校教師で11%、支援級教師でも23%と、特別支援教育の授業での利用は全体としては少ないが、支援校の「聴覚障害」担当教師の場合は、3人にひとり(33%)がこのメディア教材を利用していることが注目される。比較的通常級に近い形で教科の授業を行っているためと考えられる。

「自作教材」「音声教材」「ネット上のコンテンツ」の3項目は支援校のいずれの障害種でも授業での利用が多いが、「知的障害」担当教師では、とりわけ「自作教材」と「音声教材」が主要なメディア教材として利用されていた。

(3) 支援校・支援級・通常級で教師が期待するメディア教材の利用効果

ではメディア教材を利用する際に、教師はどのような効果を得ることを重視しているのだろうか。表3に示した8つの選択肢をあげて質問したところ、支援校、支援級教師ともに回答が多かったのは「児童の関心・意欲を高める」(93%、85%)で、次は「児童の知識・理解を深める」(60%、62%)であった。通常級でもこの2項目への回答が多く、教師が授業でメディア教材を利用する際に期待する効果は学校種を越えて共通であった。

ただし、「児童の知識・理解を深める」は障害種別にみると、差がみられた。メディア教材利用の多い「聴覚障害」、「病弱・身体虚弱」で多

表3 期待するメディア教材の利用効果
(複数回答)

	上段 支援校教師
	中段 支援級教師
	下段 通常級教師
児童の関心・意欲を高める	93 % 85 85
児童の知識・理解を深める	60 62 67
児童の活動が活性化する	39 30 28
児童の思考・判断を促す	29 29 29
一斉提示することで、情報が早く確実に伝わる	25 25 37
個人の能力に合わせた学習ができる	20 25 7
児童の技能育成に役立つ	10 14 13
授業で意見の共有や議論をする機会が増える	5 7 10

く、「知的障害」で少なかった。「通常級」と同様な形で授業を進めることが多い「聴覚障害」、「病弱・身体虚弱」では、メディア教材を利用する際に知識・理解を重視する傾向があると考えられる。

また、「児童の活動が活性化する」が通常級より支援校で多く、「授業で意見の共有や議論をする機会が増える」が通常級で多く、支援校で少ないことも特徴的である。メディア教材の利用に限らず、通常級では多くの児童がそれぞれの意見を出し合い、共有したり議論したりする授業が行われることが多いのに対して、支援校では個々の子どもたちの実態に合わせて、その子の活動が活性化することを考えて授業が行われるためであろう。

4 まとめと考察

支援校、支援級の授業でのメディア利用について、通常級と比較しながらみてきた。機器の環境については「パソコン」や「デジタルカメラ・ビデオカメラ」は、支援校、支援級と通常級と同様であったが、「実物投影機」と「電子黒板」は、支援校、支援級での利用が少なく、支援校での「タブレット端末」の活用が多かった。

メディア教材についてみると、支援校では「自作教材」と「音声教材」が多く、【NHK for School 利用】や「デジタル教科書」の利用が多い通常級とは異なっていた。支援級の利用はその両者の間に位置していた。こうしたメディア教材に期待する効果は大きな傾向は一致していたが、異なる部分も見られた。

全体として、少人数の児童を対象として個別の指導にあたる支援校や支援級と、教室で多人数の児童を対象とする通常級とでは授業形態が異なること、また、支援校と支援級、支援校でも障害種により、異なる利用傾向がみられた。

一言で特別支援教育といっても、その実態は多様である。それぞれの利用の実態にあわせた機器や環境整備やメディアの提供と、障害種に関わらず、誰でも利用できる機器やメディアのあり方を今後一層考えていく必要があると考える。

参考文献

- 宇治橋祐之、小平さち子(2017) 一人一人の子どもへの支援のためのメディア利用～2016年度「特別支援学校(小学部)教師と特別支援学級(小学校)教師のメディア利用と意識に関する調査」から～放送研究と調査 2017年8月号 50-77
- 宇治橋祐之、小平さち子(2017) 進む教師のメディア利用と1人1台端末時代の方向性～2016年度「NHK 小学校教師のメディア利用と意識に関する調査」から～放送研究と調査 2017年6月号 26-51